

2011年 9月17日・「西日本新聞」では

生涯かけ「原爆」問う

「山田かん全詩集」刊行

長崎原爆の実相を訴え続けた詩人山田かんさん（1930～2003）の詩集「山田かん全詩集」（コールサック社）が今年の長崎原爆の日に合わせて出版された。生前に刊行された7冊の詩集と未収録の作品を合わせた計553編を収録している。被爆体験を基に、詩や評論通じて痛烈な社会批判を展開し続けた生涯を妻・和子さん（78）の話や作品で振り返った。（新西ましまほ）

痛烈な社会批判も

山田さんは14歳で爆心地から2・7^{キロ}の下西山町の自宅で被爆。手りゅう弾の部品作りの学徒動員から帰った直後だった。第2詩集「記憶の固執」（1969年）に収められたエッセーでその瞬間をこう表現する。

〈そして 十一時二分 時計は示し、全てが^{とま}降り、全てが始まった〉

翌日、継母の疎開先へ向かうため妹琇子さんと爆心地の浦上地区を通り、道ノ尾駅を目指した。原子野にころがる無数の遺体。その一体の頭部に、一羽のカラスが脚を乗せ、身じろぎもせず^{ゆう}にいた。〈ぼくの原形質的な出発はこの鴉^{からす}を見てしまったことから始ったのかもしれぬ〉。後にこう記したように、カラスは作品のモチーフとして繰り返し登場する。

48年、山田さんの父親が事故死する。継母と8人のきょうだいの生活のため、新制長崎高校を中退して県立長崎図書館で働き始める。詩作に本格的に取り組むようになったのはこの頃で、一時期は共産党活動にも没頭した。

原爆投下から8年がたった冬のある日、琇子さんが21歳の若さで自ら命を絶ってしまう。被爆し、貧しい生活に絶望して死を選んだ妹。心の闇と傷に寄り添えなかった悔恨、自責の念は、山田さんのもう一つの原点となった。第1詩集「いのちの火」（54年）は、全編が妹に捧げられた。

和子さんは「琇子さんは『兄ちゃんよか詩ば書かんね』と言ってくれたという作品の一番の理解者。お酒を飲んで思い出しては、涙することもあった」と振り返る。

山田さんは55年に詩誌「地人」を創刊、58年に「鯨と馬」で第1回現代詩新人賞を受賞するなど精力的に創作活動を続けた。原爆の悲惨な体験を語るだけにとどまらず、社会の不条理へ激しい怒りを向け、批判もためらわなかった。

「浦上の聖者」と呼ばれた故・永井隆博士を正面から批判したことは象徴的だ。「原爆投下は神の摂理」「人類の罪の償いに聖地浦上は選ばれた」と説き、被爆者心理の救済に寄与したとされる永井博士の言説。72年の論文「聖者・招かざる代弁者」では「原爆の内質としてある反人類的な原理をおおい隠すべき加担」と厳しく指摘した。

「原爆詩人」と呼ばれることを好まなかった。原爆は普通の人々の上に落とされ、日常の中にあるとした。40年来の親交があった作家中里喜昭さん（75）は、葬儀で山田さんが死の直前に「もう原爆は書かん」と言ったことを明かした。「8月にならなければ原爆を思い出さないマスコミや社会への強い批判」と説明している。

和子さんは、「夫は普段は口数は多い方ではなく温厚な性格。でもテレビを見ながらよく夫婦で政治や世界情勢の話をした」と振り返る。詩ができた日は、「一つ作品ができたとき」とうれしそうに話して最初に見せてくれていたという。

90年に諫早市に転居するまで暮らした長与町の自然や歴史を愛し、第6詩集「長與ながよ」（2001年）を発刊するほどだった。一方で、古川賢一郎など長崎ゆかりの詩人たちの研究にも情熱を注いだ。

1999年に肺がんが見つかった後も、病と闘いなが創作を続けた。ペンを持つ力が失われて長い詩が書けなくなると、「短句」という形で生き物をいとおしむ思いや孫への愛情をつづった。ペンが持てなくなると和子さんが聞き取って、ノートに書き留めた。

全詩集の編者委員を務め、詩稿ノートと照らし合わせて校正もした和子さんは、「初期の詩を読みたいという問い合わせも多かった。1冊にまとめることができよかった」と話している。

と紹介されています。